



渥美半島

に残る戦争遺跡に

は、伊良湖射場関連施設のほか、太平洋戦争の本土決戦を防ぐための水際作戦で設けられた施設があります。

水際作戦で造られた陣地

渥美半島における水際作戦の主な任務とは、本土決戦に備え、太平洋の沿岸線に陣地を築き、敵の侵入を防ぐことでした。この作戦は、「敵は日本分断をねらい、渥美半島に上陸する。恋路ヶ浜に上陸し西ノ浜に飛行場を建設する」という判断のも



◆一色機関銃陣地

和地町の磯浜には、岩をくり抜いたコンクリート造の弾薬庫が残り、右奥の岩礁には銃座がありました。



◆伊良湖水道機雷封鎖監視所

日出町の日出園地には、海軍の防備衛所があり、コンクリート基礎と防備衛所跡の石碑があります。



◆28 榴榴弾砲陣地

伊良湖町の宮山の東麓に、直径9mの砲座跡があります。



●伊良湖射場にあった28榴榴弾砲

とに立てられたものでした。

昭和19年(1944)、渥美半島には、岐阜県の方を中心に名古屋で編成された第七十三師団(怒)が進駐してきました。この怒部隊により、日出町の骨山付近に機関銃と野砲の陣地が造られ、堀切町の城山には野砲が備えられます。また、太平洋側のあちらこちらに、タコ壺と呼ばれる一人用の塹壕(銃撃から身を守るために使う穴)や陣地が掘られました。

そして、伊良湖岬地区には、太平洋戦争の末期の昭和20年(1945)、福井県・滋賀県の方を中心に敦賀で臨時編成された第百五十三師団

(護京)が進駐してきます。この部隊により、恋路ヶ浜から堀切海岸にかけて、戦車の侵入を防ぐ戦車壕や軍艦からの砲撃を避ける待避壕などが掘られ、陣地が構築されたことがわかっていきます。中でも、一色機関銃陣地や伊良湖水道機雷封鎖監視所は、コンクリート基礎などから戦争時の様子を垣間見ることができません。

このほか、笠山の機関銃陣地、蔵王山の陣地、高松の陣地などがあり、坑道や壕跡が残っています。

■渥美半島の主な戦争遺跡図

※この図は、「愛知県史 別冊 文化財1 建造物・史跡」などをもとに作成したものです。

